台湾小学校創立九十周年物語

樺の葉会　第三十五期　古城守一

◆はじめに◆

私は、作家・阿川弘之が言うところの「在日日本人」つまり日本国籍を有した生粋の日本人でありながら、外地で生まれ育って不幸にして敗戦で生まれ故郷を失い、国家の補償も無しに個人財産さえも没収された、いわば現代史の激動の縮図というか、特殊な実体験を持って生きてきた人種と言えるだろう。外地の小学校も無くなり、百歳近い先輩から若い我々還暦を遠く過ぎてしまった終戦時在校生までが、台北で行われた旧台北市立樺山小学校創立九十周年同窓会にて台湾の湾生仲間と再会し、同窓会前後の三泊四日(二〇〇一年十一月二十六～二十九日)の懐かしい里帰り旅行をしてきたのである。

日清戦争で、どうしようもない化外の地・台湾の割譲を受け、日本から明治の著名な先達が送り込まれて五十年、灌漑治水に始まる産業のインフラの確立から、政治、経済、教育における終戦までの日本の善政が、他に類例を見ない現代台湾の繁栄を築いたと言えよう。

私の祖父は渡台して台北の法院（日本の裁判所相当）勤務、父は台湾で生まれて長じて台北帝大教授で甘藷の研究をしていたが、父の恩師は、台湾の蓬莱米を開発した著名な教授であった。そして、小生は、台湾二世なのである。

この九月、期せずして米国で連続テロ事件が勃発、折角今年初めから計画された樺山同窓会としての公式挙行は取りやめになって、樺山同窓会会長は参加されず、日本からは、七十名弱の有志だけが参加する形になった。

◆十一月二十六日（月）快晴　一日目◆

七時十分羽田集合のところ、最寄り東急田園都市線つきみ野駅始発に乗ったもののＪＲ長津田の接続が悪く、結局、国内線から循環バスで国際線の方の羽田空港に七時二十分頃に着いた。ＪＴＢ添乗員の説明などがあって、中華航空に搭乗。小生の席は進行方向に向かって右最後尾の６２Ｊで窓側であった。機体の太い所は、右側にＩＪＫＬと４つの席が並ぶが、最後尾は胴体のケツが細いからＫＬ席はないのである。

幸運にも快晴の富士山を写真に撮れ（右）、鹿児島をオサラバするところも見えたし、台北着陸の際も回りが良く観察できた。我々羽田組（他に成田、関空、福岡組がいる）二八名は、一番早く台北に昼前に到着した。入国手続きを済ませた一行は専用バスで、台北市最古の中国寺廟として有名な龍山寺へ向かう。

以前にも台湾の同窓生と、ここに来た事があるが、今回本堂は工事中であった。写真右上は熱心な信者、右下は龍山寺出口付近。バスは更に台北市街へ進み、昔の新公園（今は二二八和平公園、これは、蒋介石一派の外省人の圧制に絶えかねた台湾人達の暴動で、その外省人の軍隊に大勢の民衆が射殺された一九四七年二月二

八日の事件を記念して命名されたものである）に行き、ここで一時間半ほどの自由行動となった。この新公園には、昔ＮＨＫ台北放送局があり、紀元は二千六百年の昭和十五年、当時幼稚園児であった小生が、数名の友達とラジオ放送劇に出演した事がある。後で出てくるＬ君もその一人であった。

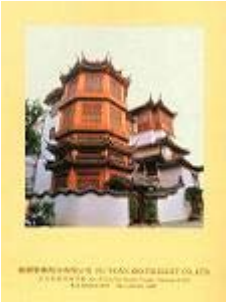
今はその台北放送局の建物の面影もない。

この界隈は勝手知ったる場所であるから、博物館、台湾大学医学部付属病院、台湾総統府、台北駅の方まで歩いて回った。

所定時刻に専用バスに帰って来て、ここから近い宿舎の来来大飯店に旅装を解き、シャワーを浴びて、さっぱりした。左は宿泊ホテルと持ち帰ったそのカードキー。

台湾は、名物カラスミ（烏魚子）無しには語れない。今回も渡台は我々旅行団とは別行動のＭ君が、コネを通じて事前手配していたものを購入して冷蔵庫で保冷しておき、帰国時に持ち帰った。

夜は、小生は終戦時在校生仲間「樺の葉」会台湾人同窓生主催の会食に招かれ、台湾会席料理（右写真）を味わった。台湾料理は数知れぬほど食してきたが、この台湾会席料理は、初めて味わったとてもお上品な料理であった。



◆十一月二十七日（火）快晴（二日目）◆

小生は朝早起きである。でも五時頃の台北市街はまだ暗い。シャワーを浴びて、昨夜近くのコンビニから買って来て冷蔵庫に入れて置いた三五０ＣＣの台湾ビールを飲む。一缶二七元（日本円で約百円）だから安い。この宿舎の来来大飯店は凄く便利が良い場所にある。今日午後訪問の旧樺山小学校は、忠孝東路という大通りを隔てて、すぐ目の前だし、昔、家があったと思しき旧樺山町もすぐ近くだ。朝食前に一人で家があった付近に行く。

数年前にも来て覚えていたので、民家はすぐ見つかったが、人が住んでいないようであった。

上写真の民家が、かつての小生家と思われるもので、古い日本瓦が特徴であるが、もう五十年以上も経っている。

旅行前から台湾の幼稚園時代からの同窓生L君と電子メールでこちらの旅行計画等について綿密に情報を交換していた。この台湾二日目は、自由行動で、オプショナル・ツアーに参加する人もいたが、私は折角L君が付き合ってくれるというので、出来ればスケッチをしようと思っていた。八時三十分ロビー待ち合わせで彼と再会した。彼は乗用車だと交通渋滞がひどいのと駐車場事情などで、高架鉄道（ＭＲＴ）がいいとの事で、これを利用した。ＭＲＴは町中では地下鉄、郊外に出ると高架鉄道になるもので、安くて早くて便利である。

来来大飯店前の善導寺駅からＭＲＴで新埔駅へ行き、ここからタクシーで、まず台北県板橋市西門街九号の福建式建築庭園・林家花園へ。この建造物の工匠達が福建省から招かれ、建材の多くが中国大陸から運ばれて三代にわたり一八九三年に完成した由である。第二次世界大戦後の混乱期に百世帯以上の人達が無断で移り住むようになり荒廃してしまった。しかし、政府が一九八五年に第二級古蹟に指定、台北県は古蹟文化保存のため林家から譲り受け、復興して一九八七年に完成して、一般公開されるようになった。貴賓室の「定静堂」、観音山や田園風景を望む「観稼楼」、畔にガジュマルの木が生い茂る「榕蔭大池」、書斎の「汲古書屋」など見所の多い邸宅であった。

再びＭＲＴで新埔駅から引き返し、台北車站は先の洪水の影響で使えないため、迂回する事にして、西門駅・中正記念堂駅経由で淡水駅へ向かう。バスに乗り継いで紅毛城（サント・ドミンゴ城）に行く。懐かしの観音山が見えた。

前回台湾に来たときは月曜日で休館のため入れなかったが、今回はゆっくり中を見た。

建造物の構造はスケッチにはとっても魅力的なものであったが、ここでゆっくり出来ない事情もあって写真だけ撮り、帰国後スケッチにして小生のホームページ「やまと美術館」に展示した。帰りは徒歩で淡水駅まで行く。途中、魚丸湯（イーワンータン　魚のつみれ団子で、中に味付牛挽肉が餡の様に入っていた）を食べたが、これがあっさりして美味しかった。味をしめて翌日、翌々日のホテルの朝食で、もっぱらこの魚丸湯（イーワンータン）をよそってもらった。

一旦、ホテルに戻ってからL君の案内でタクシーに乗り、北京ダックのランチを食べに行く。台湾ビールは飛行機内で飲んでから、あっさり味が気にいった。生ビールは、更に美味い。ご当地で飲むビールは何処でも美味いものだ。

食後は小生の希望によりL君が古い町・大同区を案内してくれた。古代に湖であった台北の地は土砂の堆積で盆地になり、やがてその湿地と窪地に土着の平埔族が住むようになった。その後大陸から漢人がやってきて開墾して、今の台北の中心区は次第に発展して、台北で最も古い街「ばんか」（現在の萬華区）が形成され、十九世紀初頭には「ばんか」は台南、鹿港と並んで台湾三大都市の一つに数えられ、台北市の発祥地となった。この「ばんか」を始め、台北各地に移民集落が出現したが移民間の争いも深刻になり、一八五三年の争いで「ばんか」を追われた泉州同安県の移民達は、淡水河河畔の大稲てい（現在の大同区）へ移り、ここを新たに

開墾して十九世紀末には「ばんか」よりも商業が盛んになった。萬華区と大同区を散策すれば、両区の昔日の面影に出会う由だったので、ここ大同区を選んだ。L君の親族が、ここで種苗店

（上写真参照）をやっているという偶然もあって、エンツアイや香草の種を頂いた。この界隈は乾物問屋街で、デンブ、蓮の実、梅干し、ミッセンなど土産を買ってホテルに戻った。

午後四時半にホテル・ロビーに全員集合して、宿舎来来大飯店の大通りを隔てた目の前にある台湾政府の警察庁に相当する台湾政府の内政部警政署の建物（写真下）を特別の計らいで訪問する。

左の部分拡大写真は、建物の玄関部分で、上から内政部警政署徽章、

ひさし化粧部分、緑色大理石製の柱である。

樺山小学校校舎が内政部警政署になっている訳だが、懐かしい昔の教室、講堂（左上）、階段、廊下、校庭（左下）などを散策して回った。

写真も撮って良いとの配慮もあって、旧校庭で全員の記念写真も撮って名残惜しい校舎を後にした。

上の写真は旧校庭から玄関方向を撮ったもので、後方の大きなビルが宿舎の来来大飯店である。

夜は宿泊ホテルのB2レストランで、日台合同同窓会九十周年記念パーティが開催され、L君の他、台湾の同期生も何人かいて、懐かしく歓談した。パーティが終わってL君が有名な士林の屋台を案内してくれたが、もう満腹状態で食指は動かなかった。士林の屋台は異臭プンプン、騒音も大きく、まさに若者の天国であった。

◆十一月二十八日（水）快晴 三日目◆

今朝も早朝シャワー、缶ビール、散歩の三点セットを実行した。台北駅の方へぶらぶら行き、コンビニで昔懐かしい玄米乳と豆乳を見つけたので買って帰り、朝食の時に飲む。

滞在早や三日目、夜はつい食い過ぎて仕方がないので来来大飯店の朝食ヴァイキングでは、もっぱら軽い台湾粥や魚丸湯（イーワンータン）、果物を取る。魚丸湯は、七時半過ぎないと出さないというのを無理して、よそってもらった。何でも御願いすると実現する。

湾生の小生、台湾東海岸は知らなかったので、今日のオプショナル・ツアーは、花蓮・タロコ峡谷観光を日本で申し込んでいた。八時三十分ホテル・ロビー集合、専用バスで松山空港に向かう。松山空港及び花蓮空港は、軍用空港と併設のため写真撮影禁止であった。

また、以前、ガソリンをボトルに入れて持ち込み機内爆発事件があった由にて、液体ボトルは検査対象であった。検査官が、小生の首からたらしたウーロン茶のボトルの臭いをかいでいた。横から見たら珍奇な光景であったろう。

上は台北松山と花連間の行き（上）、帰り（下）の航空券である。

花蓮に着いて専用バスで大理石工場見学に始まり、山間に入ってからの花蓮、台中、南投県にまたがる総面積約九萬二千ヘクタール、国際観光地の台

湾最大の太魯閣国家公園は、それなりに雄大な自然を味あわせてくれた。天然の大理石がふんだんにゴロゴロしていて、断崖絶壁の狭い峡谷を途中で専用バスを降りて見物した。太魯閣は、タイヤル族頭領タロコの名に由来するそうである。

帰りに東椰館と言うところで郷土料理の昼食をとってから、併設の大理石やメノウなどで作った見事な工芸品を主体にした土産物屋を案内された。そして実は帰りの時間を気にしながらアミ族の踊りを見物していた。大理石は白黒色のは安価で、緑の入ったものほど高級品で、混じりけのないのはスタンドなどで、光が透けて見える。旧樺山小学校校舎が内政部警政署になった事は前述の通りであるが、ここの玄関の柱は、緑色の高価な大理石をふんだんに使っている。前述の拡大写真で御覧になれる。

残念なことに、この観光は、今晩、台湾樺の葉会開催の会食に間に合うように台北に引き揚げ無ければならないため、押せ押せスケジュールの行程が極めてタイトで、スケッチどころではなかった。花蓮・タロコ峡谷観光はせめて一泊くらいは欲しいところだ。

口達者な添乗員のチンコロ姐ちゃん（失礼、ちゃんとした台大卒らしい。）のコントロール宜しく帰りの空路も順調で、オンタイムで台北に帰着出来て、夜の「樺の葉会」会食も満喫した。三日間、よう飲んで、よう食べたなあ。

◆十一月二十九日（木）快晴　四日目◆

何というか、天候は必ずしも良くない季節なのに天気男の面目躍如たる所以で、今回の台湾滞在中は、清々しい良い天気に恵まれた。台北最後の朝の早朝シャワー、缶ビール、散歩の三点セットを早めに済ませて、午前六時前の薄暗い台北市街を東門の方角へ歩く。　何で、こうウロチョロしているかというと、台湾に来て初日に1枚しかスケッチしていないので、作品を一枚でも多く描きたいのである。そしてスケッチは、「東門」「台湾総統府」「台大医学部付属病院」「台湾監察院」「台湾内政部警政署（旧樺

山国民学校）」の5点を仕込んだ。「台大医学部付属病院」は、中に入って、売店や食堂を偵察してきたが、何というか、ここで生まれ育った小生にとっては外国の意識が無いのである。。写真やスケッチを見ても分かる通り、日本は良い近代建築を遺産にしたと思う。

写真は東門（右上）、台湾総統府方向（右下）、台大医学部付属病院（左上）、旧樺山小学校玄関（左下）である。

台大医学部付属病院でない方の台大医学部病院は、現代建築の高層ビルで、小生は何の興味も抱かなかった。

十二月始めに選挙とかで、台北市内は、選挙運動というか、鳴り物入りの選挙合戦で騒々しかった。台北空港では、良いレイトで、日本円に換金して、チャラ銭七０元は、ジャスト最後の台湾ビールで、喉を潤して消えた。羽田の通関も樺山九十周年同窓会と言ったら、渡航トランクも開けずＯＫでパスした。土産の「豚肉デンブ」も申告せず。

台湾は、テロの危険国非該当の由であったものの、旅行社ＪＴＢも七十名弱が何の問題も起こさずに全員無事で帰国出来た事をとても喜んでいた。外交辞令にせよ、めでたし、めでたしである。

羽田国際線から国内線ターミナルへの循環バスを利用したあと、羽田～たまプラーザ直行便のバスで帰った。長文を読んでいただいて、お疲れ様でした。

以上

注記

このページは、ＨＴＭＬ形式ではなく、**アクロバットのｐｄｆというファイル形式**で、作りました。

文芸春秋並の縦書三段組に、画像をふんだんに取り入れ、また、ここからリンク先にジャンプするホームページは、小生として初めての試みです。

良かったよ、とか、読みやすかったよ、とか、ここをこうすると、もっと良いよ、やっぱＨＴＭＬ形式の方が良い、とかのご感想を「やまと掲示板」サイトにアップ頂けたら嬉しいです。

尚、スケッチを掲載した「やまと美術館」は**ココ**をクリックするとジャンプします。

又、本文中の画像でクリックすると**拡大画像**にジャンプしますから、試して見て下さい。